

# 保育職志望学生のEQテストにみる日常的行動と意識の特性 ——新任幼稚園教諭との比較より——

## A Comparison of Advancement on Emotional Intelligence Quotient of Students interested in Child Care Workers and First Year Kindergarten Teachers

永松昌樹 稲垣実果 石川隆行 田中真紀  
NAGAMATSU, Masaki INAGAKI, Mika ISHIKAWA, Takayuki TANAKA, Maki

### 1. はじめに

EQとは「Emotional Intelligence Quotient」の頭文字をとったもので、心の知能指数、情動（感情）指数と訳される。EQ能力をわかりやすく簡単に言えば、人生をたくましく生きていくための総合的な力、コミュニケーションに関わる能力で、近年このEQについても注目されることが多くなってきた。知識力は高くても、すなわちIQが高くても、自分自身の能力を十分に発揮できなかつたり、あるいは周囲の人たちとうまく関わりを持てなかつたり、といった事態が散見され、これらはEQ能力に問題があつてそれらの能力が低いことが原因と考えられている。

EQ能力は、自分自身を理解し、自分の考えをしっかりと表現でき、自分の感情や情緒を制御し、他人を理解し、集団においては皆と協調して仲良くできること、さらに、他人の感情や情緒を理解し、欲求を我慢し、自分をしっかりとコントロールしながら社会に適応しつつ、たとえ挫折しても自分で立ち直ることのでき、自分を積極的に表現できるというように、普段の人々が持っている意識と行動に反映されるものである。EQ能力が低ければ、周囲の人々と上手に関わることができなかつたり、職場での人間関係がぎくしゃくしているように感じたりする。

EQ能力を高めるには、コミュニケーション力を養い、言葉に関心を持ち、言葉と戯れることが必要とされる。言葉の力を高めることで、人間は言葉で思考し、自分と対話することで、自分自身をコントロールでき、言葉を介して他との意志疎通が可能となる。言葉なくしては、社会での的確な意思伝達は行えない。他の人々との意志疎通ができるようになり、自分自身を制御できるようになれば、社会で活躍できることになるのである。そして、人と社会の関係も見えてくるようになるのである。

ところで保育者に求められる資質として、一般的には「優しさ」、「思いやり」、「誠実さ」、「責任感」などが挙げられる。保育者としての専門的な能力として、幼児の主体性を引き出しつつ、一つの活動の中で諸能力が発達していくように総合的な指導力、幼児期の特性に応じることができると指導力が求められており、これは「幼児を内面から理解し、総合的に指導する力」である。また、幼児理解に基づき、一人一人の発達の課題に応じて計画的に環境を構成し、育てたいものや指導の方法など、「保育を具体化する構想力、実践力」が必要である。さらには、保育者としての得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、小学校や保育所との連携を推進する力、保護者及び地域社会との関係を構築する力、幼児一人一人の内面を理解し、信頼関係を築きつつ、集団生活の中で発達に必要な経験を幼児自らが獲得していくことができるように環境を構成し、援助する力

など、多様な能力が必要とされている。

これらの資質を有しているとしても、保育職に従事できなかつたり、たとえ従事できたとしてもその実力を発揮できずに離職を余儀なくされてしまつたりする例は少なくない。その背景には保育職を志望している者の行動様式や物事に対する考え方に何らかの問題を抱えていることが一つの要因となっている場合がある。

本研究では、保育者としての職業に従事することを希望している短期大学の学生と、新規採用されたばかりの1年目の幼稚園教諭に対して、EQテストを行い、EQ能力の違いをみることによって、普段の生活にみられる行動や考え方の違いについて分析し、学生の特性を見出すことを行うことを目的とした。EQテストは、共感性、自己認知力、自己統制力、粘り強さ、柔軟性、楽観性の6つの性質を測ることが可能であり、本稿では、将来、保育職を目指す短期大学に入学した学生のEQ能力は、新規採用された幼稚園教諭として従事している人たちのEQ能力と比較してどのような違いが見られるのか、そして、社会人に必要な力としての行動と意識を検討するための資料としたい。

## 2. 研究の方法

本研究の目的を達成するため「EQテスト」を実施した。保育職を志望するS短期大学児童教育学科2008年度入学生を対象とし、2008年10月に「保育内容・健康1」の授業終了後に実施した。一方、新任幼稚園教諭は2008年度からK市内の私立幼稚園に新規採用された教員で、2008年11月にS短期大学にて開催されたK市私立幼稚園新任教員研修会の会場にてEQテストを実施した。

アンケート用紙を回収し、データの集計を行なうためにパーソナルコンピュータを使用し表計算ソフトで入力を行い、すべての質問項目について回答が得られた322人のデータを統計アプリケーションソフトSPSSに読み込み、記述統計、度数分布などで単純集計を行なった。

さらに統計的な違いを見るために、クロス集計 ( $\chi^2$  検定)、平均値の差の検定 (t 検定) を実施した。t 検定では、等分散性の確認を行なうために Levene の検定から有意確率を求め、有意確率の5%を越える項目については、等分散を仮定するt値から、5%に満たない項目については、等分散を仮定しないt値から、有意確率を求めた。

## 3. 研究の結果

表1に示したEQテストにみるプロフィール得点をみると、学生よりも新任教師の方がすべての項目について平均値が高いことがわかる。特に、共感性、自己認知力、粘り強さについては統計的な有意差がみられた。本稿では有意差のあった“共感性”、“自己認知力”、“粘り強さ”の各項目についての結果を示す。

表1. EQテストにみるプロフィール得点

EQ項目	種別	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定						
						F値	有意確率	t値	自由度	有意確率(両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間	
共感性得点	2008年度新任 2008年度生	101 141	14.86 14.13	2.298 2.237	0.229 0.188	0.062	0.803	2.464	240	0.014	0.73	0.295	0.146	1.308
自己認知力得点	2008年度新任 2008年度生	101 141	12.57 11.71	2.321 2.545	0.231 0.214	0.571	0.450	2.704	240	0.007	0.87	0.320	0.235	1.495
自己統制力得点	2008年度新任 2008年度生	101 141	10.60 9.82	3.086 3.411	0.307 0.287	0.387	0.534	1.828	240	0.069	0.78	0.427	-0.061	1.623
粘り強さ得点	2008年度新任 2008年度生	101 141	13.04 11.72	3.085 3.520	0.307 0.296	0.885	0.348	3.034	240	0.003	1.32	0.436	0.464	2.182
柔軟性得点	2008年度新任 2008年度生	101 141	12.40 11.97	2.514 2.580	0.250 0.217	0.025	0.875	1.275	240	0.203	0.42	0.333	-0.231	1.080
楽観性得点	2008年度新任 2008年度生	101 141	11.72 11.45	2.980 3.127	0.297 0.263	0.265	0.607	0.690	240	0.491	0.28	0.400	-0.512	1.063

### 1) 共感性

生活場面において人間は言葉や表情などによるコミュニケーションを通じて、周囲の人の心のある程度知ることができる。そして、ただ単に知るだけではなくその人と全く同じように感じたり、その人の気持ちを察したりすることができる。これを共感性という。共感性の定義は認知的要因・情動的要因の2つに大別されることが多く(加藤・高木, 1980)、藤吉・田中(2006)によると、他者がある感情状態にあることを認知し、他者の立場にたつて他者の考えや役割を予想し、他者と同様の感情を共有するという3つの過程によって成立するとされる。

本研究の結果においては、新任教師のほうが短期大学生よりも共感性の得点が高いことが示された。澤田(1998)は、加齢に伴い、感情認知能力の発達とともに、きめ細やかな理解にたつた共感が可能になるとのべている。また、育児相談者を対象に情動的共感性を調査した清水(2003)は、大学生を対象に調査を行った加藤・高木(1980)の結果と比較し、育児相談者という専門職業集団の情動的共感性が高いことを明らかにし、職業と共感性との関連を指摘している。さらに三谷(2007)は、保育の場における保育者の専門性の根幹に「共感的知性」があるとし、共感性は保育の専門性の成熟に大きく関連していると指摘している。本研究で示された結果は、これらの指摘を反映したものになっていると考えられる。

保育や教育の現場において、子どもたちは教師に共感的に応答されることで、自分が受け入れられ理解されていると感じ、教師への愛着を深めていくとともに安定した感情を発達させていく。子どもの共感能力を高めるうえでも、まずは教師が周囲の人々に分け隔てなく共感する態度を子どもの前で示すことが必要であり、共感性は保育職、教育職に携わるにあたり重要な意味をもつのであろう。

この共感性を測定する項目中で「新聞、週刊誌などの記事には興味を引かれる」という設問に対して、学生では「はい」との回答者数が42人(29.8%)と少ないが、「はい」と回答した新任教師は55人(54.5%)であった。「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3つのカテゴリと「新任教師」「学生」との $\chi^2$ 検定の結果では有意な差が認められたが( $\chi^2$ 値14.913、 $p < 0.01$ )、EQテストの得点でのt検定では有意差はみられなかった(表2)。新任教師の方が新聞や週刊誌を読んでいる人が多く、時事的な社会問題に関心を示している傾向が学生に比して新任教師に強いようである。

これは、新任教師の場合、教師という職業に就き、社会的役割として子どもの教育を担っていくという社会的責任の感覚が強くなったことが要因の1つとも考えられる。また、中根(1967)は、青年期における対人関係の特徴の一つとして「社会一般の人々への苦境への共感という発達段階に達していない」と指摘している。この指摘のように社会に出る前の学生と比較して、新任教師においては、自分の周りの身近な出来事や人々への関心だけでなく社会的な出来事・社会一般の人々へと関心の範囲が拡がり、それとともに自分自身や子どもを取り巻く社会的問題についてより自発的な興味生まれやすいと考えられるのではないだろうか。

また、「小さな子どもの世話や友達を助けるのがうれしい。」では、「はい」と答えた学生は141人中134人(95.0%)で、「どちらともいえない」と回答した学生は7人(5.0%)、新任教師では101人中87人(86.1%)が「はい」と回答し、「どちらともいえない」と回答した人は14人(13.9%)、学生と新任教師共に「いいえ」と答えた者はいなかった。 $\chi^2$ 検定では学生と新任教師との間に有意差が認められ( $\chi^2$ 値5.878、 $p < 0.05$ )、t検定の結果では、学生の得点新任教師よりも有意に高い。保育・教育の現場においては、子どもに世話をやき、手を貸すばかりではなく、時には子どもが自分で考え実行することを見守ることも広い意味で子どもの成長を促すことにつながる。本研究の結果においても、子どもの考える力や意欲を引き出すためには、単に子どもに手を貸すだけではない新任教師の保育観・教育観

の深まりを示しているとも考えられるのではないだろうか。

「スポーツを見に行くのも、テレビで見るのも嫌いだ。」では、「いいえ」との回答者が学生で110人(78.0%)、新任教師では88人(87.1%)であった。この間に対して否定的な意見を持った新任教師の得点が学生と比して高かった。今回の調査の場合は、対象となった学生の所属する短期大学では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭といった3つの資格や免許を取得するために、多忙な学生生活を送っており、スポーツ系のサークル活動に打ち込んだりする時間が採れず、スポーツへの興味や関心が深まらないことも一つの原因と考えられる。保育職志望の学生は、先にも述べたように学業のほか、アルバイトや、児童教育学科の特徴でもある“ピアノなどの習い事”など、自由に裁量できる時間に他にやるべきことが多いため、自由時間を自身の活動ではなく、他の人たちが興じているスポーツの観戦などに費やすことは少ないのではないかと考えられる。ところが幼稚園教師は年齢など関係なくアクティブなイメージがあり、体力が必要とされる職業であり、さらに自由時間に多様な余暇行動がみられるなかで、スポーツ観戦などの行動もその一つであることから表出した結果かもしれない。

さらに「親たちの気持ちをあまり考えないで動いた方がいい。」の問いに対して「はい」と答えた新任教師はいなかったが、学生には4人(2.8%)が「はい」と回答した。「いいえ」と答えた人は学生で104人(73.8%)、新任教師では90人(89.1%)であった。否定的な意見を持った新任教師の得点が学生の得点に比べて有意に高かった。そして、「いろいろな意見を出す人がいるが、無駄なことが多い。」の問いに対しても、否定的な意見を持った新任教師の得点が学生に比して有意に高くなった。

藤吉・田中(2006)が述べるように、共感性には他者の立場にたって他者の考えや役割を予想するという過程が必要である。また、伊藤(1967)によれば、心理臨床家のRogersはカウンセリングにおいて「治療者の共感的理解」をクライアント(来談者)の人格変容のための必要十分条件の1つとしてあげており、相手の立場にたって内側から共感しようとするためには自分自身の見方や判断、価値観をしばらく保留・停止しておく必要があるとしている。昨今、保育・教育現場では子どもや保護者に対する支援において「カウンセリングマインド」が求められているが、本研究の結果は、短期大学生に比して新任教師が、他者尊重・他者受容が根底にある共感の態度を重視していることを示すとも考えられるであろう。

## 2) 自己認知力

自分自身を知ること、身のほどを知することは、私たちが生きるうえで欠かせないことである。「自分を知る」ことは完全にはできそうもないが、自分の長所が短所になってしまっているのではないか、自分はいぬぼれているのではないだろうか、などと反省しておくことが必要になる。「知人や友達に学ぶところは多い」という質問には、学生、新任教師ともに「いいえ」との答えはなかった。「はい」は、学生では132人(93.6%)、新任教師では99人(98.0%)でほとんどの人が肯定している。また、「多くの宗教的な考えは、若者の精神的発達に必要なだと思う」という質問において、「はい」と答えた人は学生では13人(9.2%)、新任教師では17人(16.8%)、「どちらでもない」は、学生では78人(55.3%)、新任教師では52人(51.5%)という結果となった。「はい」と答えたのは1割程度で、半分の人が「どちらでもない」と答えている。

大村(1997)は自己認知力を自分の本当の気持ちを自覚すること、自己の心的状態と定義している。本研究の結果、自己認知力については短期大学生の得点に比して新任幼稚園教諭の得点が高いことが明らかとなった。また、この自己認知力を測定する項目中、「自分が嫌だと思うことは、どんな場合でも拒否する」に関しては新任幼稚園教諭と短期大学生の間で有意な差がみられ、否定的な意見を持った新

表2. 共感性得点を構成する質問項目別の得点

共感性項目	種別	N	平均値	等分散性のための Leveneの検定		2つの母平均の差の検定						
				F値	有意確率	t値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間	
											下限	上限
共感1:自分の部屋はいつも整理整頓してある	2008年度新規採用者	101	0.50	0.006	0.940	-0.015	240	0.988	-0.001	0.095	-0.188	0.185
	2008年度保育職志望学生	141	0.50									
共感2:自分の意見を友だちや他の人に押し付けけない	2008年度新規採用者	101	1.48	0.018	0.894	1.300	240	0.195	0.114	0.087	-0.059	0.286
	2008年度保育職志望学生	141	1.36									
共感3:小さな子どもの世話や友だちを助けるのが嬉しい	2008年度新規採用者	101	1.86	25.190	0.000	-2.274	155.584	0.024	-0.089	0.039	-0.166	-0.012
	2008年度保育職志望学生	141	1.95									
共感4:文学(小説・詩・歌集など)が好きだ	2008年度新規採用者	101	0.98	0.003	0.953	-1.606	240	0.110	-0.169	0.105	-0.376	0.038
	2008年度保育職志望学生	141	1.15									
共感5:新聞、週刊誌などの記事には興味をひかれる	2008年度新規採用者	101	1.32	2.398	0.123	3.459	240	0.001	0.366	0.106	0.158	0.575
	2008年度保育職志望学生	141	0.95									
共感6:気の合った友だちが少ないので悩んでいる	2008年度新規採用者	101	1.83	12.235	0.001	1.832	239.546	0.068	0.130	0.071	-0.010	0.269
	2008年度保育職志望学生	141	1.70									
共感7:犬・猫・小鳥にはあまり関心がない	2008年度新規採用者	101	1.45	12.827	0.000	-1.909	190.053	0.058	-0.193	0.101	-0.392	0.006
	2008年度保育職志望学生	141	1.64									
共感8:親たちの気持ちをあまり考えないで動いたほうが良い	2008年度新規採用者	101	1.89	45.473	0.000	3.407	234.429	0.001	0.182	0.053	0.077	0.287
	2008年度保育職志望学生	141	1.71									
共感9:スポーツを見に行くのも、テレビで見るのも嫌いだ	2008年度新規採用者	101	1.85	15.078	0.000	2.051	239.918	0.041	0.128	0.062	0.005	0.251
	2008年度保育職志望学生	141	1.72									
共感10:いろいろな意見を出す人がいるが無駄なことが多い	2008年度新規採用者	101	1.71	20.794	0.000	3.308	237.883	0.001	0.259	0.078	0.105	0.413
	2008年度保育職志望学生	141	1.45									

任幼稚園教諭の得点が高かった。

小松(2002)によると、青年期は自己に対する混乱や葛藤を経て自己を統合していく時期であると述べている。社会に出る前の短期大学生は、新任幼稚園教諭に比べ、自己の混乱や葛藤に対して適切に対処することができず、自分に嫌だと感じる事が生じた場合に、自分の意思を相手に明確に伝える傾向があるのかもしれない。一方、幼稚園教諭の場合、社会人として責任ある態度や行動をとる場面が立場的に多くあり、子どもの対応やその業務に対して自分の意思や欲求を抑制しなければならない状況が多く生じることが考えられる。

### 3) 粘り強さ

研究の結果から、“粘り強さ”については短期大学生の得点に比べて新任の幼稚園教諭の得点が高いことが明らかになった。これにより、新任の幼稚園教諭は短期大学生よりも粘り強い特性を有していると考えられよう。粘り強さと同義とされる忍耐力について、高井(2007)は加齢に伴って忍耐力が高まる傾向であることを示唆している。また、幼稚園教諭に求められる資質を検討した石川(2002)や藤尾・古川・浅川(2007)では、幼稚園現場の責任者が幼稚園教諭に積極性や責任感を強く求めることが報告されている。本研究で見いだされた結果は、これらの報告を反映したものといえるかもしれない。周知のとおり、幼稚園教諭は子どもを受容するとともに、何事にも真摯に取り組む姿勢が必要である。

表3. 自己認知力得点を構成する質問項目別の得点

自己認知力項目	種別	N	平均値	等分散性のための Leveneの検定		2つの母平均の差の検定						
				F値	有意確率	t値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間	
											下限	上限
認知1: 服装や行動で、他人の注意を引くのは嫌いだ	2008年度新規採用者	101	0.89	0.004	0.953	-0.999	240	0.319	-0.109	0.109	-0.324	0.106
	2008年度保育職志望学生	141	1.00									
認知2: 歴史的人物の伝記に興味がある	2008年度新規採用者	101	0.73	2.102	0.148	1.917	240	0.056	0.201	0.105	-0.006	0.407
	2008年度保育職志望学生	141	0.53									
認知3: 知人や友だちに学ぶところは多い	2008年度新規採用者	101	1.98	11.187	0.001	1.767	229.762	0.079	0.044	0.025	-0.005	0.093
	2008年度保育職志望学生	141	1.94									
認知4: 自分の家族のことなどをよく他人に話す	2008年度新規採用者	101	1.49	0.110	0.741	0.743	240	0.458	0.074	0.099	-0.122	0.269
	2008年度保育職志望学生	141	1.41									
認知5: 多くの宗教的な考えは若者の精神的な発達に必要なと思う	2008年度新規採用者	101	0.85	0.119	0.730	1.353	240	0.177	0.114	0.084	-0.052	0.280
	2008年度保育職志望学生	141	0.74									
認知6: 友だちの行動が、結構、気になる	2008年度新規採用者	101	0.56	0.119	0.730	-0.692	240	0.490	-0.074	0.107	-0.285	0.137
	2008年度保育職志望学生	141	0.64									
認知7: 友だちの話を聞くよりも自分が話すほうが多い	2008年度新規採用者	101	1.17	2.286	0.132	1.482	240	0.140	0.147	0.099	-0.048	0.343
	2008年度保育職志望学生	141	1.02									
認知8: 尊敬できる人物は歴史上も現代にもほとんどいない	2008年度新規採用者	101	1.64	5.446	0.020	1.557	228.240	0.121	0.140	0.090	-0.037	0.317
	2008年度保育職志望学生	141	1.50									
認知9: 自分が嫌だと思うことは、どんな場合でも拒否する	2008年度新規採用者	101	1.55	5.667	0.018	2.960	235.181	0.003	0.249	0.084	0.083	0.416
	2008年度保育職志望学生	141	1.30									
認知10: 友だちに言えないようなことをよく夢に見る	2008年度新規採用者	101	1.70	3.102	0.079	0.901	240	0.368	0.079	0.088	-0.094	0.251
	2008年度保育職志望学生	141	1.62									

そのため、幼稚園教諭は子どもの対応や、その業務に対して粘り強さを強く求められるのであろう。また、このような点は項目別に差異を検討した結果、例えば「不得意分野もあきらめずに一生懸命挑戦する」の高さにも表れている。

なお、表4の項目別の検討に関して、「トイレや入浴の時間はわりに長いほうだ」では新任の幼稚園教諭の得点が短期大学生の得点よりも低く、また「面倒な仕事をよく途中で放り出してしまふ」「何をやっても気が散ることが多い」「職場や学校の遅刻・早退がわりと多い」については、新任の幼稚園教諭の得点が短期大学生の得点よりも高かった。これらの差異については、今後も詳細な検討が必要であろう。というのも、「トイレや入浴の時間はわりに長いほうだ」や「何をやっても気が散ることが多い」については幼稚園教諭という職務の多忙さを反映しているかもしれないが、これらの質問に対しては否定的な意見をもった新任の先生方が散見されたためである。

また、従来、EQ 6領域の概念(大村, 1997)をもとにEQ10領域の概念(内山, 1997)が提唱され、その妥当性と信頼性が検討されている(中・林田・草野, 2001)。したがって、このような見解をふまえ、短期大学生と新任幼稚園教諭の粘り強さについて検討することが重要であろう。

表4. 粘り強さ得点を構成する質問項目別の得点

粘り強さ項目	種別	N	平均値	等分散性のためのLeveneの検定		2つの母平均の差の検定						
				F値	有意確率	t値	自由度	有意確率(両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の95%信頼区間	
											下限	上限
粘り1: 文具やスポーツ用品などを大切に する	2008年度新規採用者	101	1.50	0.767	0.382	0.059	240	0.953	0.006	0.096	-0.184	0.195
	2008年度保育職志望学生	141	1.49									
粘り2: 不得意分野もあきらめずに一生懸命挑戦する	2008年度新規採用者	101	1.22	7.774	0.006	2.071	204.111	0.040	0.211	0.102	0.010	0.411
	2008年度保育職志望学生	141	1.01									
粘り3: トイレや入浴の時間はわりに長いほうだ	2008年度新規採用者	101	0.78	4.042	0.045	-3.112	207.455	0.002	-0.374	0.120	-0.611	-0.137
	2008年度保育職志望学生	141	1.16									
粘り4: 失敗してもあまり怒りえない	2008年度新規採用者	101	0.78	0.240	0.625	-1.750	240	0.081	-0.204	0.116	-0.433	0.026
	2008年度保育職志望学生	141	0.99									
粘り5: 何か行なうとき、下準備をきちんとする	2008年度新規採用者	101	1.18	0.073	0.788	1.491	240	0.137	0.150	0.101	-0.048	0.348
	2008年度保育職志望学生	141	1.03									
粘り6: 面倒な仕事をよく途中で放り出してしまう	2008年度新規採用者	101	1.72	30.132	0.000	3.735	239.808	0.000	0.311	0.083	0.147	0.476
	2008年度保育職志望学生	141	1.41									
粘り7: 他人に励まされるときかえってうまくできない	2008年度新規採用者	101	1.62	6.993	0.009	1.862	229.962	0.064	0.170	0.091	-0.010	0.350
	2008年度保育職志望学生	141	1.45									
粘り8: 何をやっても気が散ることが多い	2008年度新規採用者	101	1.56	12.040	0.001	4.433	234.783	0.000	0.458	0.103	0.254	0.661
	2008年度保育職志望学生	141	1.11									
粘り9: 自分の部屋はどうも乱雑だ	2008年度新規採用者	101	0.78	0.833	0.362	0.831	240	0.407	0.094	0.113	-0.129	0.318
	2008年度保育職志望学生	141	0.69									
粘り10: 職場や学校の運動・早退がわりと多い	2008年度新規採用者	101	1.89	150.250	0.000	6.164	211.804	0.000	0.501	0.081	0.341	0.661
	2008年度保育職志望学生	141	1.39									

#### 4. まとめ

本研究は、保育職に従事することを希望している短期大学の学生と採用されたばかりの新人幼稚園教諭に対して、EQテストを実施し、テスト項目として掲げられている「普段の生活にみられる行動や物事に対する考え方」について、学生と社会人との違いを分析することから保育職志望学生の特徴を抽出することを目的とした。以下のような結果が導かれた。

- ・将来、保育職を目指す短期大学に入学した学生と、新規採用され幼稚園教諭として従事している人たちを対象にEQテストを実施し、双方を比較した結果、EQ能力が高いのは新規採用され幼稚園教諭として従事している社会人である。
- ・EQプロフィールでは、保育職を志望する短期大学学生よりも、幼稚園で保育職に従事している新任教師の方が、共感性、自己認知力、自己統制力、粘り強さ、柔軟性、楽観性すべての項目についての得点が高い傾向を示し、特に、共感性、自己認知力、粘り強さの得点では統計的に有意な違いがみられた。
- ・「粘り強さ」では5つの項目で、「共感性」では4つの項目、「自己統制力」「柔軟性」では3つの項目、「楽観性」では2つの項目、「自己認知力」では1つの項目で、統計的に差異を示した。
- ・行動面では社会人として必要不可欠な常識的な行動力に違いがあり、意識の側面では特に社会に適応

していくために必要な心がけや心構えに違いがみられる。

EQ テスト項目では、社会に出ることによって身につく能力も多く、例えば、物事に柔軟に対応できる力、協調性、物事を簡単に諦めたりせず、粘り強く最後までやり遂げようとする力、様々なことが挙げられるが、保育者に限定されることなく、一般的に常識を有する社会人として求められる資質である。将来、保育職に従事したいと思い、児童教育学科に入学した学生が、先にも述べたような能力を身につけるためにはどうすればいいのであろうか。

その一つには保育実習と教育実習が格好の機会ではないだろうか。保育実習や教育実習では、保育者の子どもたちへの援助方法や、発達段階などを含めた子どもたち様子、実習先の保育所や幼稚園の方針などを学ぶことができるだけにとどまらず、学生という立場ではなく、保育者の一人として保育職に従事することで、社会の一員であるという自覚を持てるようになり、指導案を作成した上で、その計画をもとに保育実践をすることによって自信につなげることが可能となる。志望する職業や業務に直接的に関わることによって、社会人基礎力の向上がみられることは多くの大学が在学中から学生をインターシップとして企業や団体に送り出していることから明白である。また、ボランティア活動や地域の行事などに積極的に参加することもEQ能力を向上させる機会となろう。学生時代のボランティア経験は、様々な経験が積み重なり、同年代の人はもちろんのこと、年配の方々など、多くの人と関わる機会を持つことができ、自分とは異なった考えや行動様式を持つ人たちと仕事をすることができる。自分の意見を相手に伝えたり、相手の意見を尊重したりして、意思疎通ができ、他人と気持ちを分かち合うほか、自制心が生まれ、協調性が育つといった仲間意識を育てる大変良い機会である。グループワークだけでなく、人から話しかけられたら直接その相手に返事することや、他人からの働きかけを待っていないで、自分からも働きかけることを心がけていきたいものである。他に、話し合いなどの際は、「はい」や「いいえ」など一言だけの返事で終わりにせず、会話をつなぐことも重要である。

今回の研究では、比較の対象の幼稚園教諭は新任教員だけであったが、勤続年数の長い教員のデータも揃えることができれば、もっと有益な検討ができそうだ。また、継続的に今回のデータを提供してもらったことができた新任教員に対して調査を取り続け、また短期大学の学生についても同じようにデータを取ることで、EQ能力の変化を追跡検討していくことで、キャリア教育への活用や社会人基礎力の育成に有益な資料となるのではないだろうか。

#### 【参考文献】

- 1) 金村美千子 2007 『保育原理—保育者になるための基本—』 同文書院
- 2) 諏訪きぬ 2001 『現代保育学入門—子どもの発達と保育の原理を理解するために—』 フレーベル館
- 3) 荘司雅子 1985 『幼児教育学』 柳原書店
- 4) 井上浩子・涌井貞美 2005 『EQを高める言葉の遊び』 グラフ社
- 5) 佐藤るり子 2005 『遊びながらEQ・IQを伸ばす「まいと式」幼児教育の秘密』 株式会社コスモトゥーワン
- 6) 星一郎 1997 『アドラー博士の子どものEQの高め方』 ごま書房
- 7) 藤尾淳子・古川雅文・浅川潔司 「幼稚園教員の力量観に関する研究（2）—幼稚園教諭、保護者、園長との比較検討から—」 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 351.
- 8) 石川隆行 2002 「保育学生の心理的資質の一研究」 一宮女子短期大学研究報告, 41, 335-342.
- 9) 田淑子・林田りか・草野美根子 2001 「看護学生のEQ因子の研究（1）」 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 2, 49-54.
- 10) 大村政男 1997 『ズバリ診断 EQテスト』 現代書林
- 11) 高井範子 2007 「青年期および成人期における忍耐力と失敗概念に関する研究」 太成学院大学紀要, 9,

31-40.

- 12) 内山喜久雄 1997 『EQ その潜在力の伸ばし方』 講談社
- 13) 小松万喜子 2002 看護大学生の共感性と対人関係尺度に関する学年比較 第33回日本看護学会論文集 看護教育, 135-137.
- 14) 藤吉貴子・田中奈緒子 2006 「成人と青年における共感性と罪悪感の差異」 昭和女子大学生活心理研究所紀要 9, 99-105.
- 15) 加藤隆勝・高木秀明 1980 「青年期における情動的共感性の特質」 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 16) 三谷大紀 2007 「保育の場における保育者の育ち —保育者の専門性は『共感的知性』によってつくられる」 佐伯 胖(編)『共感・育ちあう保育の中で—』 ミネルヴァ書房 p.109-154.
- 17) 中根千枝 1967 『タテ社会の人間関係』 講談社
- 18) Rogers, C. R. 著 伊藤博(訳編) 1967 『パーソナリティの変化』 ロージャズ全集 第13巻 岩崎学術出版社
- 19) 澤田瑞也 1998 『カウンセリングと共感』 世界思想社
- 20) 清水嘉子 2003 「育児相談者の援助と情動的共感性」 母性衛生 44, 431-441.